

## 日本教育学会 若手育成委員会報告

### 1. 若手育成委員会の活動

若手育成委員会では、若手交流委員会の開催とワークショップのアーカイブ化が2021年度の活動の成果としてあげられる。2021年度の若手交流会は、8月25日（水）13時30分から15時まで第80回日本教育学会大会において、オンラインで実施した。当日のタイムテーブルは以下のようである。

- 13:30～13:35 開会のあいさつ
- 13:35～14:05 基調講演を北村友人氏（東京大学）「コロナ禍は教育学研究を「停滞」あるいは「発展」させるのか—若手研究者の現状から可能性を考える—」
- 14:05～14:15 調査系研究者の講演として丹間康仁氏（千葉大学）「コロナ禍のフィールドワークをめぐる逡巡とアプローチの再考」
- 14:15～14:25 文献系研究者の講演として尾崎博美氏（東洋英和女学院大学）「コロナ禍に求められる研究・教育活動」
- 14:25～15:00 グループディスカッション（30分程度）・終わりの言葉

いずれの講演も参加者から大好評であった。その後、参加者全員がブレイクアウトルームにおいてグループディスカッションを行い、コロナ禍においてどのように研究を続けているか、課題はなにかといったことを情報交換してもらった。参加者は80人をこえ、感想を聞いても「とても満足した」という回答が多かった。今回の若手育成委員会の報告は、講演者の先生方からいただいた講演内容の要約（感想を含む）、および委員それぞれからのコメントを掲載させていただくことにした。講演者の生の文章および若手育成委員会は委員それぞれが役割をもち、そのそれぞれの役割からコメント（感想）を記すことで、より一層若手育成委員会の活動やその重要性を会員の皆様に伝えることができると判断したためである。報告の形式は例年とは異なるがご了承いただきたい。

なお、以下には若手交流会での講師からの講演内容の要約、および若手育成委員からのコメント、

ワークショップのアーカイブ化についての報告を担当委員から報告してもらい、2021年度の若手育成委員会の活動の記録とさせていただきます。

（委員長 井田仁康（筑波大学））

### 2. 若手交流会の講師から

**コロナ禍は教育学研究を「停滞」あるいは「発展」させるのか**

—若手研究者の現状から可能性を考える—

北村友人（東京大学）

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の広まりは、教育学研究者たちにもさまざまな影響を及ぼしている。オンライン学習の導入をはじめとして学校や大学における学びのスタイルに転換を迫ったり、経済活動の停滞などが家庭環境にも影響を及ぼすことで子どもたちを不安定な状況に追い込んだり、感染リスクの高い高齢者たちが生涯学習の機会を制限されるなど、教育に関わる多様な側面に甚大な影響をもたらしている。こうした状況は、教育学研究を進めるうえでも困難をもたらしているが、それと同時に、新たな教育学研究に挑戦する機会ともなり得る。そこで、本講演では、現下のコロナ禍のなかで厳しい状況に置かれている若手研究者たちに関して、その苦労を十分に理解したうえで、いかにこうした状況のなかで研究を進めていくことが可能であるのか、講演者なりの考えを述べた。

第一に、ウェビナーの開催をはじめオンラインでのやりとりが広まるなかで、かえってこれまでアクセスしにくかった人たちとも繋がることのできるようになり、情報収集や意見交換がしやすくなった面を指摘した。その際、指導教員や先輩研究者など、すでに国内外の人的ネットワークを構築している研究者たちのサポートを受けることも必要である。第二に、国内外の移動が難しい時期だからこそ、自宅でもできることを積極的に見つけて、取り組んでいく姿勢が大切であることを強調した。たとえば、先行研究のレビューを進めたり、オンラインでの学習機会を活用して言語の習得に努めたりといったことは、このような状況下でも可能な取り組みである。第三に、これまでに

入手してきた資料やデータの整理を行い、それを論文などにまとめ、研究成果を積極的に発信していくことが重要である。近年、オンラインによる国際学術誌への投稿が容易になり、国際学会もオンライン開催されるなど、国際的な研究発信の機会も増えている。第四に、情報やデータの収集において、国際機関（ユネスコ、OECD）や国内外の大学がホームページ上で公開している多様なデータベースの活用方法について紹介した。

ここで挙げたような実践的な対応に取り組むと同時に、このコロナ禍のなかで若手研究者（そして、すべての教育学研究者）にとって最も大切なことは、これまでの「常識」に捉われず、柔軟な思考と態度でもって自らの教育学研究を改めて見つめることである。国境や領域を越えた学術コミュニティの一員として、新たな発想や視点から「教育」のあり方を考えていきたい。若手研究者たちが、さまざまな工夫を重ねて、研究を止めることなく、知的探究を続けていくことを願うと共に、教育学研究のコミュニティ全体で、そうした次世代の研究者たちを支えていくことの重要性を強調して、本講演の結びとした。

### コロナ禍のフィールドワークをめぐる逡巡とアプローチの再考

丹間康仁（千葉大学）

研究者が現地へ足を運ぶフィールドワークは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延により、日本国内でも2020年春頃から実施が困難となった。現地に足しげく通う前提が崩れ、筆者も現場への関わり方を逡巡した。しかしコロナ禍は、フィールドワーカーが自身の方法論を問い直すきっかけをもたらした。そこで若手交流会の本報告では、フィールドワークを行う研究者の間で、コロナ禍での葛藤や挑戦を共有することを目的とした。

コロナ禍では現場に行くことがラポールを失わせる場合もある。対面での感染リスクがあり、異なるコミュニティや他所の地域からの介入には現地の人々が大きな不安を抱く。それゆえ、オンラインでのリモート・インタビューも取り組まれた。しかし、「身体が不在の参与観察」<sup>1)</sup>は可能か。研究者が現地の人々からいかなる存在とみられるのか、あらためて想像する機会が生まれた。

政府や所属機関の要請で、外出や出張を伴うフ

ィールドワークが制限される場合もあった。「大学はまさに不要不急な存在」<sup>2)</sup>という開き直りもでき、自らの将来にとって「必要火急」な調査を抱えていた学生や院生は特に困惑した。しかしその調査とて、そもそも現地の人々から「不要不急」とみなされてきたものなのかもしれない。多くの人々が「不要不急」とみなすような事象に、解明の必要性を示していけるか、自らの研究課題の意義にも問い直しが迫られた。

コロナ禍の現実的な対応として、研究の手順や目的を組み替えたり、対面以外の方法でフィールドと関わりを保とうとしたりした。一つは、研究計画のうち、現地調査や参与観察を延期し、先々予定していた郵送調査を前倒して集中実施した。また一つは、リモートも含めて「会う」ことへのこだわりを捨てた。「遅い知」としてフィールドワークを捉え、「つきあいを重ねていく」視点に立った<sup>3)</sup>。2020年5月、ゼミ生とのフィールドワークで関わってきた社会教育の現場の方々に寄せ書きのメッセージを送り、同時にコロナ禍での困り事や工夫を質問紙で答えてもらった。結果は、学会発表の機会を差し置き、まず地域の方々に共有した。何（誰）のための研究かを問い直した。

フィールドワークは他者の日常を対象とする。しかしこの新たな感染症は、人類誰ももの日常を少なからず脅かした。「私たちにとってのいまのフィールドは自分の足元にあり、その先に、調査先であるフィールドがある」<sup>4)</sup>と指摘されるとおり、フィールドは調査者と被調査者の間で地続きのものであると痛感した。

自身の研究テーマに関わって、コロナ禍だからこそ明らかにすべき事象はないか。コロナ禍の文脈で生じている気づきや学びから、人間と社会の動きを実証していく研究に取り組みたい。

#### 〈註〉

- 1) 飯田玲子・井上陸美・神崎隼人・桜木真理子・二重作和代・長塚正一郎（2021）「COVID-19状況下においてフィールドワークはいかに可能なのか？—若手座談会の報告」『文化人類学』第85巻4号，pp.770-772.
- 2) 佐藤郁哉・吉見俊哉（2020）「知が越境し、交流し続けるために—大学から始める学び方改革・遊び方改革・働き方改革（特集：コロナ時代の大学）」『現代思想』第48巻14号，pp.8-20.
- 3) 床呂郁哉編（2015）『人はなぜフィールドに

行くのか—フィールドワークへの誘い—』東京外国語大学出版会。

- 4) 西村ユミ (2020) 「コロナ禍でフィールドワークする〈身体知〉になる」『看護研究』第53巻5号, pp.369-373.

### コロナ禍に求められる研究・教育活動

尾崎博美 (東洋英和女学院大学)

2021年8月25日の若手交流会では講師の一人として報告を務めました。教育学の様々な分野の研究者が集う場での意見交換もあり本当に貴重な機会をいただきましたこと、委員会及び運営の皆様にご心より御礼申し上げます。

報告では、テーマが「コロナウイルス感染症拡大の中での研究活動」であることから、自分の専門とする教育哲学・教育思想史領域をかなり意識しました。また、教育学の若手研究者が各大学等で教育現場や大学の取り組みに大きな役割を期待される立場であることを踏まえて、教育機関の中での研究者としての視点も重視しました。

教育哲学・教育思想史領域からコロナウイルス感染症拡大のなかでの研究活動をとらえる際には、まずは何よりも「教育」という営みそのものの問い直しや新たな課題・可能性が提示されます。コロナ対策として社会に出される数々の政策等の中で改めて浮き彫りになったのは、社会における「教育」や「学校」の不可欠性です。そこでは、なにゆえ「教育」や「学校」が社会でエッセンシャルであるのか、またそれを守るとはどういうことか、という問いを突きつけられています。

加えて、教育現場・教育実践が可視的に変化するなかで、教育の質を問う議論が例えば「オンライン vs 対面」のような単純な二項対立図式に陥る危険性も露呈しました。しかしこのことは、教育学研究が、「ヴァーチャル」「会う」「対話をする」「ふれる」「その場にいる」といった教育のことばそのものを問い直し、新たな視座から共通認識を創り上げていく可能性に向けた役割を担うことを示してもいます。

上記のような教育のことばや概念自体の変化は、学校等の日々の授業実践、教育方法、成績評価、カリキュラム編成等の様々な場面において顕在化します。若手研究者の皆さんは、おそらくはそれをダイレクトに感じ取ることでできる立場でもあります。今まさに経験している変化がこれからの

教育における「スタンダード」を形成する議論の基礎材料となることを踏まえると、今後の教育学研究の財産となりうる研究がここから生まれるチャンスでもあります。

最後に、本交流会の依頼をいただいたとき、「若手研究者の皆さんを鼓舞できるように」との言葉があり個人的に感動したことを記録しておきます。研究者の皆さんを育てるのが使命であると強く認識する本学会の一助となれば幸いです。

### 3. 委員から日本教育学会若手育成委員会による若手交流会の感想

昨年度と趣向を変えて実施した若手交流会に、司会進行として参加いたしました。前半には、領域の異なる3人の先生方にご講演いただきましたが、共通して「コロナ禍にあって、教育学を前進／発展させる」というメッセージが含まれていたように感じました。

まず、東京大学の北村友人先生による基調講演は、「コロナ禍は教育学研究を「停滞」あるいは「発展」させるのか—若手研究者の現状から可能性を考える—」というタイトルにふさわしく、若手研究者の現実をとらえつつ、彼・彼女らが明るい未来を見ることができるといえるようなご講演でした。特に、最新の国際的な研究動向や教育を取り巻く現状も踏まえつつ将来の展望を示してくださいだった点が、北村先生ならではの言えました。

次に、千葉大学の丹間康仁先生による「コロナ禍のフィールドワークをめぐる逡巡とアプローチの再考」というご講演です。このコロナ禍で最も痛手を受けているであろうフィールドワーカーの丹間先生が、逡巡しながらも、どのように現状を克服なさろうとされているかという点が聞きどころでした。「不要不急」とみなされがちなフィールドワークから、「何(誰)のための研究かを問い直す機会になった」という言葉がとても印象的でした。

また、東洋英和女学院大学の尾崎博美先生はそのご講演「コロナ禍に求められる研究・教育活動」において、教育思想・哲学というご専門領域の特性ゆえに、インドアで「ひきこもる」ことに向いているのではと思っていられしたにもかかわらず、実際は大変に「辛かった」と仰いました。そして、その辛さの原因は、「哲学・思想研究とディスカッション／フィールドワークの不可分性」

にあり、「リアルな世界で考える、見る、触れる、があって『言葉』が生きる」ことに気づかされたそうです。

後半はブレイクアウトセッションを設定しました。5、6人ほどで、30分程度のセッションでしたが、まだまだ話したいと思うほどに充実していました。参加者が抱えている悩みだけでなく、現状を打破するためのアイデアも出し合い、私も励まされました。

今回の若手交流会は、若手育成委員会のメンバーとして最後のイベントでした。日本教育学会だけでなく、日本比較教育学会などの関連学会における若手支援企画で顔を合わせる「常連さん」が増え、オンラインという制約がある中でも、若手の方々がネットワークを形成していることを肌で感じることができました。最後になりましたが、井田仁康委員長、チームワークのよい委員の方々にも感謝申し上げます。ありがとうございます。

(副委員長 鴨川明子 (山梨大学))

コロナ禍の1年を改めて振り返ると、大学の授業方法や学生生活に関しては喫緊の課題として多く取り上げられ、大学教員のネットワークの中で情報やアイデアの交換が盛んになされた状況に比して、研究者が直面した研究上の困難が積極的に話題になることは少なかったように思う。若手交流委員会の委員として交流会にはじめて参加し、最も印象に残ったことは、研究領域や手法を問わず、教育学研究を進める上でそれぞれの立場で皆が困難を感じていたことへの再認識と、その困難について自覚的に言葉にして共有してきたかということへの自省であった。

今回の若手交流会では、基調講演、および、2つの報告を通じて、それぞれの立場から研究上の困難が説明され、その中でどのように研究と向き合ったのが率直に語られた。講演や報告を受けて、ブレイクアウトセッションでは「悩んでいたのは自分だけではないということに励まされた」という感想が多く共有された。

コロナ禍での研究上の困難は若手研究者に限るものではないが、若手にとってより大きな制約になっていることは確かだろう。だからこそ、コロナ禍をくぐり抜けて研究を継続した経験は、研究者としての今後の自信につながるはずだ。交流会での励まし合いと知恵の交換を力に、それぞれの

持ち場での研究の継続発展が期待される。

(池谷美衣子 (東海大学))

昨年度に引き続いて今年度も、新型コロナウイルスが若手研究者だけでなく、多くの人々に影響を与え続けた。オンライン環境での「余白」の無さに得も言われぬ歯がゆさを感じてきたがゆえに、今年度は特に、若手が交流する場を設けること自体に意味があると感じた。ここでの「余白」とは、研究会なり、催しがあった際の、参加者同士の何気ない雑談、研究会後に「あの場では聞けなかったんですが…」「あの質問の意図は…」といった会話を主に想定している。今回も、ブレイクアウトルームセッションで交流する場が設けられ、若手がざっくばらんに言い合える機会を設けたことが重要だったと感じる。

ただしそれは、どんなテーマでもよいわけではなく、今回ご登壇頂いた先生方から教育学研究の広がりや深さを示していただいたからこそ、参加者にとって有益なものとなったのだろう。というのも、講師の先生方からは、コロナ禍での研究を主にお話しいただいたが、その前提には、これまでご自身がどのような(に)研究をしてきたか、来歴の説明が不可欠であった。「コロナ禍で」というテーマはあったものの、来歴をお話いただく中で、教育学研究の研究方法やテーマの多様さ、深淵さを感じ取らせていただいた。それは純粋に「へえ、そういう研究の仕方があるのか」や「同じ悩みを持ちながら研究をしているんだ」といった好奇心を刺激したり、苦悩を共有したりするものであった。来歴や悩みは「余白」でしか聞けないものも多くあると思う。各講師の研究の最新動向と合わせて、その裏側を開襟してもらったことは、参加者にとって「私はこういうテーマで、こういう研究をしてきたんですけど、今(コロナ禍)は…」とセッションで口を滑らかにしたのではないかと推し量る。

教育学研究は多様な研究テーマと研究方法によって成立している。そうした中で、若手研究者は、研究テーマと研究方法等を含め、「オリジナリティ」を前面に打ち出した論文の「量産」が外的に求められ、場合によってはそれを内面化している。コロナ禍で息苦しさを感じやすい今だからこそ、教育学研究の多様さと深さを改めて純粋に感じ取り、交流する機会をもらうことができ、大変有難

かった。

(高野貴大 (茨城大学))

若手交流会の参加者(82名)のうち、35名の方が感想を寄せてくださいました。内訳は、60%強が大学院生、教員・研究員は30%程度でした。同交流会を知ったきっかけとして、日本教育学会・大会のHPや案内のほか、知人からの紹介が多く挙げられていました。

参加者の感想(自由記述)では、多くの方から、zoomのブレイクアウトルーム機能を用いた参加者同士の意見交換・雑談の時間について積極的に評価をしていただきました。コロナ禍で他大学の(若手)研究者との交流の機会そのものが失われているなかで、ざっくばらんな話をできたことがよかったという声が多く寄せられました。このような意見交換の時間によって、自身の研究領域以外の他分野の参加者と交流できたこと、コロナ禍で研究をすすめることに苦労しているのは自分だけではないと知ることができたことなども、有意義な点として挙げられていました。「交流の時間がもっとほしかった」という声が複数寄せられたことは、今回の意見交換・雑談の時間が大変有意義だったことを示しています。

また、今後望まれる企画として、研究手法ワークショップ、アカデミックスキルの向上のための企画などが挙げられていました。実施方法については検討が要されますが、他分野の参加者と交流する機会を保ちつつ、それぞれの研究内容や関心によりふみこんだ企画の両立が望まれているようです。

最後に、本交流会について、修士の学生(あるいは学部生)もより参加しやすいよう、敷居を低くしていくことも欠かせないように思います。研究者志望でない学生も含めて、同年代の院生・研究者のネットワークがつくられていくことは、これからの教育研究において重要になるように思いました。

(渡邊真之 (東京大学大学院))

#### 4. 若手育成委員会によるワークショップのアーカイブ化

若手育成委員会では、2017年3月より様々なワークショップを開催してきています。その開催の意義は、若手研究者の様々なニーズに応答するこ

とです。2016年9～10月にかけて会員メーリングリストを通じて行われた「若手会員のニーズに関するアンケート調査」(回答者数293名)では、学会が行う企画への参加希望として、「海外の研究動向に関するワークショップ」や「著名な研究者による討論集会」、「研究手法ワークショップ」が上位に位置づけられました。この調査結果を踏まえ、若手育成委員会では、研究方法論(2017年3月)、論文指導(2018年3月)、研究者としてのキャリア(2017年8月・2019年3月)、国際学会発表(2018年8月)、日本学術振興会特別研究員申請(2019年8月)といった様々なニーズに応えるワークショップを企画し、著名な研究者を講師に迎えて開催してきました。いずれも参加者から高い満足度が得られています。

しかし一方で、何らかの都合で参加できなかった方から不参加を惜しむ声も聞こえてきました。会場が遠く足を運べなかったり、出産や育児といったライフイベントと重なるなど、若手研究者の行動を制約する条件は数多く存在します。また毎回少しずつ企画内容を変えていますが、以前のワークショップの価値がなくなるわけではありません。むしろ著名な講師陣がワークショップのために作成した資料を、1回きりでお蔵入りにしてしまうのはあまりにも勿体無いという問題意識がありました。

そこで若手育成委員会では、2期目の油布佐和子委員長のもとでワークショップのアーカイブ化を構想するようになりました。具体的には、講師の先生方がワークショップのために作成した資料、そして当日の様子をビデオカメラで録画した映像を、会員がオンライン上で閲覧・視聴できるようにする試みです。3期目の井田仁康委員長のもとで構想はさらに具体化し、日本教育学会の若手育成委員会のメールアドレスに紐づいたGoogleドライブやYouTubeアカウントを活用して実施する計画まで行き着きました。奇しくも、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うワークショップのオンライン化は、アーカイブとして残す録画のハードルを下げています。4期目の藤田晃之委員長のもとで、アーカイブ化されたワークショップを会員の皆様にお届けできることかと思えます。今しばらくお待ちください。

(藤本啓寛 (早稲田大学))